

法蔵寺の歴史(二十一)

約百二十年間の仮本堂

七堂伽藍の境内

法蔵寺は、現在二十八代住職です。当山は九代住職の時に倉ヶ崎から大桑に移転されたことは、先の歴史にも載せました。

お寺の規模は、現在の約二倍ほどだったと伝わります。七堂伽藍(しちどうがらん)を備える立派な威容だったそうです。

戊辰戦争で本堂焼失

その立派な本堂も一八六八年(明治元年)の戊辰戦争の戦火にあい、焼失してしまいました。

その後、理由は定かではありませんが、しばらく本堂再建はされませんでした。しかし、本堂がなくては古来の仏教儀式や祖先の供養ができません。そこ

再建まで約百二十年

で、法蔵寺の下寺(したでら)の一つ、日光(善法)の庵寺のお堂を移築することになりました。それが新本堂を建築するまでの「仮本堂」だったのです。

法蔵寺の本堂再建は、旧本堂焼失から実に百二十年後になります。第二十七代(先代)住職の時です。その間、仮本堂として移築されたお堂が本堂として長年使用されてきました。

移築されたお堂は、作りはしっかりしていて、そのまま本堂として使用してもいいのではと、思うくらいでした。しかし、長年の風雨による痛みはあちこちに出ていて、いよいよ再建との運びになりました。

困難を極めた本堂再建

ただ、本堂を再建するといっても容易なことではありませんでした。

法蔵寺では、ここ数百年本堂建築は行われていませんでした。これほどの大事業は檀信徒の方々の協力なしではできません。未曾有の協力要請に、檀信徒の皆様のご理解は大きいものでした。しかし、当時の総代、建設委員、地域の世話人の皆様のご理解と甚大なお働きにより、何とか昭和五十七年四月、ついに今の本堂が再建されたのです。



昭和 55 年まで使用された仮本堂

結界(けっかい)ご寄進

この度、日光市豊田の山本正様が亡きご母堂様追善のため、埼玉の松林秀光様がご当家先祖累代菩提のために、年回法要に際し、それぞれ「結界(けっかい)」を「ご寄進くださいました。「結界」とは、儀式などを行う聖なる空間を保つため、仏界と俗界を隔てる境のことです。

様々な仏教儀式に欠かせない仏具です。ここに深く感謝しますとともに、末代まで大切に使用させていただきます。有難うございました。

合掌



ご寄進いただいた結界御施主名が記されています